

キラリ 熱中時間

深谷市にゆかりがあり、市内外で活躍する個人や団体を紹介します。

女子走り幅跳び(T64)でパリ2024パラリンピックに出場！



パラリンピック陸上選手
深谷市親善大使
たかくさき
高桑早生さん
変わらぬ情熱で
世界に挑む

「陸上競技は今となっては生活の一部です。」そう語るのは深谷市ゆかりのアスリートで、深谷市親善大使も務める、高桑早生さんです。

高桑さんは、小学校6年生の時に骨肉腫を患い、中学校1年生で左ひざ下を切断しました。そして、知人に連れられ見に行った陸上の大会で、スポーツ用義足を履いて生き生きと走る選手を見たことをきっかけに、パラ陸上を始めました。パラリンピックの初出場から12年がたち、今年、4大会連続での出場となるパリ2024パラリンピックに、女子走り幅跳び(T64)の日本代表として挑みます。

「競技に対しては、身体一つを余すことなく使って勝負するところに魅力を感じています。できないと思っていたことができるようになった瞬間や、身体が自分のコントロール下に入ったときに面白さを感じます。」と全身全霊で陸上競技

を楽しむ高桑さん。過去3大会の自分を「ロンドンは怖いもの知らずの初心者。リオは4年準備した駆け出しアスリート。東京はさまざまな思いと不自由が渦巻く混乱状態。その時々でできることに精一杯取り組んできましたが、力不足を感じることも多々あります。」と冷静に振り返ります。

4回目の挑戦を控え、「世界レベルの大会の一つひとつこなしていく時に、自分の成長を感じます。」と力強く答える高桑さんに、パリ2024パラリンピックへの意気込みを聞くと、「入賞と自己ベスト更新が目標です。4回目のパラリンピックですが、今が一番『世界に挑戦するぞ!』という気合いが強いです。」と、12年前から色あせない陸上への情熱を感じさせる高桑さん。パリ2024パラリンピックでの活躍に目が離せません。



▲くす玉開きで新紙幣発行のお祝いにも参加していただきました
※高桑さんのパリ2024での競技日程などは6ページをご覧ください

男女共同参画 情報コーナー

ともに認め合い 支え合う 元気と笑顔で参画するまち ふかや
図人権政策課 ☎574 - 6643

ワーク・ライフ・バランスについて考えてみませんか？



『ワーク・ライフ・バランス』とは、『仕事と生活の調和』のことで、誰もが、やりがいや充実感を感じながら働き、仕事上の責任を果たす一方で、子育て・介護や、地域活動、個人の自己啓発など、さまざまな活動を調和させることで健康で豊かな生活ができるようにしよう、という考え方やその取り組みのことです。

現在では、共働きの世帯も一般的となっていますが、その一方で、『男は仕事、女は家庭』といった性別による役割分担が一般的だったころの意識や、それを前提としたものが多く残っていることから、仕事と生活が両立しにくい状況にあります。

このような状況を解消するためには、社会全体として取り組んでいく必要があります。自分が理想とするバランスを自分自身が決め、より充実した生活が送れるよう、自分のライフスタイルを見直し、『できること』から始めましょう。一人ひとりが問題意識を持つことが、社会が変わる第一歩となります。市民・企業・行政が一体となって、『ワーク・ライフ・バランス』のとれた社会を目指していきましょう。

ふっかちゃんの日常から
深谷が見えてくる

ふっか 散歩

132 ワモア川本～図書館・川本総合支所編～

今回はまだまだある、ワモア川本の魅力を紹介するよ。複合施設ということもあって、施設内には公民館のほかにも図書館と、総合支所があるんだ！ワモア川本にはここで紹介しきれない部屋や設備もたくさんあるから、ぜひ行ってみてね！



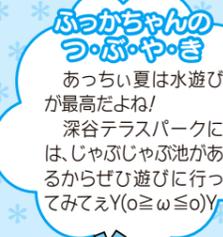
▲図書館の中は落ち着いた雰囲気です。読書にもってこい！何を読もうかなあ～。



▲図書館のすぐ隣には公民館の児童室があるよ。広い室内にいろいろな遊び道具があるから、たくさん遊べるね！



▲ここが新しくなった川本総合支所の窓口だよ。手続きごとに窓口の看板が色分けされていて分かりやすくなっているよ！



ふっかちゃんの
つぶやき
あっちい夏は水遊びが最高だよ！
深谷テラスパークには、じゃぶじゃぶ池があるからぜひ遊びに行ってみてねY(0≧ω≦0)Y

心の広場

幡羅中学校 1年(現2年)
比嘉 玲南さん



認めあえる社会

コロナの影響で、海外の人々との交流が減った3年間。海を越えた先に暮らす人達との文化の違いは、簡単には理解できないものもあるのではないかと私は思います。

私は、父方の家族がみんなペルーの生まれのため、幼いころから異文化との交流が、周りの同世代の子よりも多くあるのでは、と思います。善くも悪くも地球の反対側の大陸に暮らすおばあちゃんやいとこは食生活や家での過ごし方、服装などが違うので、理解できない日本の文化があったと思います。

そのころ私はよくお父さんに、「もっと、おばあちゃんと仲良くしてあげなよ。おばあちゃん、悲しむよ。」

などと言われていました。わかっているのに理解しようとしれない、心のせまい自分自身に胸が苦しかったのを覚えています。

六才ぐらいのころ、私以外の家族が全員インフルエンザになり、おばあちゃんと2人で泊まることになりました。私はすごくゆううつで、イヤでしかたなかったです。おばあちゃんとは、言葉も自由にかかわせない上に生活リズムも違い大変でしたが、身振り手振りで、意外にも伝えられて、初めて、心と心がつながったようにも思えました。その日の夜。ペルーでは、暇な時などにカードゲームをしたりするというのを教えてもらいました。国や文化が違ってもゲームを楽しみ、盛り上がるということ。その夜の、ポーカーは2人の心と心をつなぐ、掛け橋になったように思いました。

みなさんは、海外の人だから、黒人だからなどという理由で人を差別したり、偏見をもったりしていませんか。言葉や文化、見た目が違えど、みんな同じ人間です。違いを知ること、そして理解しようとするのが、大切だと思います。互いに理解しあえば、その小さな違いは、きっとどうでもよいことなのでしょう。

私は今でもよくおばあちゃん達とトランプで遊んだりします。私の持っている物がスペイン語では何というのか教えてくれたりします。私も、日本語を教えたりします。おばあちゃんに会うと、日々新しい発見ができます。ペルーのこと、そしておばあちゃんのことをいつの日か、完璧に理解し合う時が来たら。その時が待ち遠しいです。